

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0990200040		
法人名	特定非営利活動法人 醍醐会		
事業所名	醍醐の森川崎グループホーム		
所在地	栃木県足利市川崎町2316番地		
自己評価作成日	令和 元 年 7 月 31 日	評価結果市町村受理日	令和 2 年 1 月 14 日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/09/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人栃木県社会福祉協議会		
所在地	栃木県宇都宮市若草1-10-6		
訪問調査日	令和 元 年 9 月 20 日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当ホームは認知症高齢者に対して家族や地域への理解を深めるために、積極的に夏祭りや家族会、クリスマス会等のイベントを企画して実行している。夏祭りでは隣の施設と合同で開催し、職員・家族会・ボランティアから構成される実行委員会を組織して地域住民にも参加を促し、参加人数450名を超える当法人最大のイベントの規模となっている。そうした地域との連携を大切にすることにより、常日頃から入居者一人一人が地域の一員として生活することに力を注いでいます。広大な敷地の花壇には季節を感じられる花や樹木が植えてあり、又、農園には季節の野菜が栽培され、それを入居者が職員の手をかりて世話をすることにより社会的役割を与えて、自信を持って「ここが我が家です。」と言えるように支援している。当ホームでは宿泊事業も利用し、医療施設と緊密な連携をしてターミナルケアを行っている。開設以来何人もの入居者の看取りも行っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

当事業所は、市南東部、渡良瀬川沿いの住宅地にあり、見晴らしの良い広々とした場所に位置する。「温かい家庭的な雰囲気大切に、一人一人の尊厳を守り、地域に根ざし自立した生活・楽しくゆつくりと安全な生活を送る」との理念に基づき、職員は、利用者のことを考えて支援ができていくかを常に念頭に置き、日々のケアに当たっている。広い敷地を活用した畑や、季節の花々を植えた手入れの行き届いた庭は、利用者にとっても大きな喜びになっている。併設のデイサービスセンターと複合型サービスセンターとお互いに連携しながら、より良いサービスを提供している。また、隣接する学童保育所とも日頃から交流がある。これらの施設や家族会等が協力し開催する夏祭りは、地域住民が楽しみに集まる年間の最大イベントにもなっている。学童保育の子供達や保護者の繋がりから、事業所が幅広い世代に理解され、地域にとって身近な存在になっている。地域の中で、利用者は持てる能力を發揮し、役目を持ちながら生活している。利用者も職員も笑顔で暮らすことのできる、家庭的で明るい事業所である。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆつたりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、地域に密着し、そして地域に貢献できる施設の運営を目指して、その事業理念を共有している。	理念に基づき、温かい家庭的な雰囲気の中で、人として一人一人の尊厳を守り、地域に根ざした自立した生活、一緒に楽しくゆっくりと安全な生活を送ることを大切にしている。職員は理念を読み上げて共有し、利用者のことを考えて対応しているかを常に意識している。迷いや疑問が生じた際は理念に立ち返り話し合い実践に繋げている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	町内会費を納入し、回覧板を受け取り、届ける等、職員と入居者が一緒に行い、積極的に町内会のイベントを通して地域の一員としての自覚を持たせるよう支援している。	日々の散歩や回覧板のやり取りにより、利用者や近隣住民とが接する機会は多く、日頃から交流をもっている。町内会から地域行事や利用者にとって有効なお出かけ情報を得ている。行事参加や外出を通して自然に地域との交流が図られている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	当ホームで開催される夏祭り、クリスマス会等のイベントへの参加要請等によって認知症への理解を促進するばかりでなく、積極的に町内会活動に参加する度に認知症の理解と施設の関わり方の説明の機会を得ている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に、当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時に、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に意見を吸い上げるようにしている。	年6回、自治会の連絡役を議長とし、民生委員、包括支援センター職員、市職員、家族らが参加し開催している。意見交換と共に、地域からの情報を得ている。その情報を基に、高校生の実習受け入れや、利用者参加のカフェ運営などが実現している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	当ホームの運営推進会議の委員である職員、行政関係者と共に「協働」を礎に信頼関係を築くことが出来るようになった。	運営推進会議の繋がりもあることから、市担当者とは普段から話しやすい関係が築かれている。必要な書類提出だけでなく、事業所の空き状況についてなど、情報交換もスムーズに行われている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、身体拘束の定義や事例を挙げて話し合いの機会を設けてメディスンロック防止等についても取り組んでいる。研修報告も行き、スキルアップに繋げている。	全職員が身体拘束について理解し、拘束のない介護に努めている。職員が身体拘束についての外部研修に参加した際は、内容を他の職員に伝えて共有している。全職員が参加する毎月の定例会議で、事例と対策を話し合い、支援の質の向上に繋げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、「栃木県高齢者虐待対策マニュアル」を中心に勉強会を開催し、その予防に努め、事業所以外でも虐待があった場合の通報義務等についても討議、検討を重ねている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	以前、地域福祉権利擁護事業を利用していた利用者がいた為、十分に理解しているが、毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、その必要性がある対象者の有無を検討している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	当ホームへの入居契約締結時可能な限り、管理者、計画担当責任者又は、それに準ずる職員が担当し、詳細に至るまで説明し、理解、納得を図り改定がある場合には当ホームで組織されている家族会の総会等で説明し、新たな契約締結を行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議員に日常も含めて積極的に、当ホームで開催されるイベント等に参加して頂き、運営推進会議開催時に、当ホームの外部評価等を公開し、それについて改善点がないか積極的に意見を吸い上げるようにしている。	職員は、利用者本人に寄り添い話を聞くほか、家族とも日頃から関わり信頼関係を築くよう努めている。年1回、家族会が春先に開催され、家族同士の交流を図る場となっている。小旅行、夏祭り、敬老会、クリスマス会等、家族も参加して一緒に過ごす機会が多く、家族からは遠慮なく意見があり、出された意見は運営に活かされている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、運営や各々の入居者の情報の共有、それに対する介護、それに対応する為の用具、器具等の購入、使用方法までの討議をしている。	管理者は、職員との信頼関係を築き、意見を言いやすい環境を作るよう努めている。備品の購入をはじめ、仕事の進め方、職員が働きやすい職場づくりについてなど、定例会議でオープンに情報を共有し、意見を交換している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者は法人の理事会等に於いて各事業給与水準等の意見を吸い上げており、定例会議に於いても職員が要望する介護し易くするための福祉用具等の充実を図り、管理者と職員の距離を近くして職場環境整備に努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	管理者は、個々の職員の介護能力を把握しており、毎月、すべての職員が参加して行われている定例会議に於いて、勉強会を開催し、さらに法人内外の研修に積極的に参加させ、それをまた、定例会議の場でフィードバックさせている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	当ホームは、栃木県グループホーム協会、栃木県小規模ネットワーク、あしかが介護支援専門員協会等に所属し、職員をそこで開催される研修会等に積極的に参加させ、ほかの事業所との交流を図り、その良い点を取り入れている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	併設されている認知症専用デイサービスを利用して入居者となる為、殆どの利用者本人との安心確保、信頼関係は既に構築されている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	現在の生活状況や不安なことを充分時間をかけて聞き取り、要望に添えるようにしている。安心して利用開始に繋がられるよう努力を惜しまず信頼関係に努めている。そして希望にそった支援に繋げ、安心して暮らせるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	当ホームでは、グループ関連事業所に居宅支援事業所を併設していない。従って、特別養護老人ホーム等に併設されている居宅支援事業所で横行する「抱え込み」を行っていない。市民に支援される施設を目指し、介護保険制度の説明を懇切丁寧に説明している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	利用者と楽しく暮らすことを基本に考え調理関係、環境整備などを一緒に行っている。自室掃除はできる範囲でお願いし、皆さんと気持ちよく過ごされようとしている。時には昔の料理を教えて頂き参考にすることもあります。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族会を組織し、家族への各種イベントの積極的な参加を促し、職員と共に入居者を支えていくことを認識して頂けるようにしています。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居者本人が「ここが私の住まいです。」と認識して頂けるようにし、家族を含め、家族の理解を得て、親戚や知り合い等の面会を積極的に受け入れている。また、買い物等で出かける際に、各々の入居者のなじみの場所を訪れるようにしています。	家族や知人に面会する機会を多く持てるよう支援している。職員が買い物に出かける際には利用者と一緒にドライブし、その道すがら、利用者がよく利用していたスーパーマーケットやお茶が飲める場所に立ち寄り楽しめるようにしている。花の手入れをする、針仕事をする、新聞を読むなど、これまで続けてきた習慣を継続できるよう支援している。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	当ホーム内で入居者が孤立しないように洗濯たたみは毎夕の入居者同士が協力して行う作業とし、散歩等で他の入居者の車椅子を押してもらったり、相互の関係を構築できるように支援している。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	重篤になり、入院した場合、退去を余儀なくされた入居者は、退院後、同グループ事業所の小規模多機能に繋げるか、併設する宿泊事業で支援するようにしている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	常に声掛けを行い「どうしたいのか?」「どう暮らしたいのか?」等を入居者本人に確認して、それを家族に伝え、要望を叶えるようにしているが、困難な場合には代替え等を考えて支援している。	毎日、利用者が何をしたいのか尋ね、日頃から、利用者の暮らしの希望を聞き取り、意向に沿うようにしている。利用者の意見をはっきり確認できない時は、家族からの情報も得て、気持ちを推し量っている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	アセスメントの時期には、基本に立ち返り、再確認している。「現在の暮らしに適しているのか?」等をサービス利用計画等の把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	各々の入居者のその日のバイタルチェックや睡眠状況で心身状態を把握し、一日の過ごし方を決定するが、入居者本人の要望も大切にしよう支援している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的カンファレンスを行い、計画に沿った支援が出来ているかを振り返り、計画変更時には数回のモニタリングを調理、デイ看護師等を含めた職員全員で行い、計画については、本人とその家族の意向を最優先し、担当の職員を中心に職員全員によって支援内容を決定し、作成されている。また、定例会議に於いても討議の機会を得ている。	毎週月曜日朝に、その日出勤の職員でカンファレンスを行い、その情報を積み重ねて、半年に一度ケアプランを見直している。家族には利用料請求書送付時に合わせて利用者の様子を報告し、そこから介護計画作成への希望を聞いている。利用者に関わる職員の意見を幅広く取り入れながら、担当職員を中心に介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日、支援経過記録を残し、アセスメントの参考にしている。また、変化に対しては細かく記録し、職員全員が把握できるようにしている。そして、次の計画に反映している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	常に入居者本人に適したサービスを提供できるよう、入居前のケアマネージャーに相談や家族に注意事項を伺い、場合によっては、当ホームの認知症専用デイサービスと宿泊事業で柔軟に対応すると共に隣接する同グループ事業所の運営する看護小規模多機能施設と連携して支援できるようにしている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買物、外食等で入居者と職員が一緒に出掛ける際は、出先に連絡を入れたり、事前に訪問し、認知症を説明して理解を求め、協働し、入居者が安心して利用できるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	当法人の委託医に隔週で訪問してもらっている。その為、各々の入居者の状況を的確に伝え、状況が変化し検討の時期になった場合は、家族等を交えて納得がいく診察ができるよう支援している。些細な変化でも委託医に連絡し、他の診察時にも経過記録を作成し、家族と情報共有ができています。	入居前からのかかりつけ医の継続受診は家族対応で支援している。委託医の往診が月2回あり、そちらを主治医としている利用者が多い。普段の様子を把握するため、これまでのかかりつけ医を主治医としている利用者も、月1回委託医の診察を受けている。診察記録、薬の情報などを共有し、利用者の変化にすぐ対応できる体制を作っている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	併設されている認知症専用デイサービス看護師と情報を共有し、些細な変化も見落とさないように適切な受診に繋がられるようにしている。更に、当法人の委託医の看護師とも同様に情報共有し、支援している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	協力支援病院と協力契約を締結し、入院元を見舞いや訪問を行った際には、先方の医療機関関係者と情報交換を密にし、できるだけ早期に「住み慣れた家」に戻れるように努めている。退院後の通院には、その入居者の状況を書面を添えて受信できるようにしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	大きな変化があり、改善の見込みがないと委託医が診断した場合、家族に直接、説明してもらい、当ホームの可能な介護範囲を納得いくまで説明し、その方針を決定し、それを入居者本人、その家族、委託医、職員と共有して支援している。	重症化した時も、利用者や家族の希望があれば、医療と連携しながら、利用者の居心地がいい環境を維持し、看取りまで支援している。利用者の終末に部屋で一緒に泊まる家族もいる。事業所の支援可能な範囲を超えた場合は、利用者にとって何が最善か納得がいくまで関係者で話し合い、決定している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議に於いて、当ホームに併設される認知症専用デイサービスの看護職員の応援を受けて、応急処置や急変時の指導や訓練を適時行っている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防訓練、避難訓練は年二回行っている。夜間、職員が一人になった場合を想定して、近隣住民に各々の入居者を担当してもらい訓練を行っている。再三、オール電化の施設にすよう行政から勧められてきたが、太陽光発電と蓄電自動車を導入し、石油、ガス等にリスク分散した為、先の震災時に耐えられたと思う。	近隣住民と協力関係ができており、一緒に避難訓練を行っている。事業所の動力源を、太陽光発電、蓄電池自動車、石油、ガスと複数持つことで災害時の安心に繋がっている。2～3日分の備蓄であれば、普段の食材を使い回して対応することができる体制になっている。	実際に近隣住民と一緒に訓練を行う中で見えてきた課題を基に、災害時の連絡手段や協力内容の詳細を詰めていくなど、協力体制の強化に向けての取り組みが期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	毎月、管理者、すべての職員が参加して行われる定例会議を開催し、画一的な介護にせず、常に個別ケアを意識の中に置き、一人ひとりの人格を尊重しながら、且つ、プライバシーを守りながら、優しい対応を心がけている。	入居時に得た利用者や家族についての情報やプライバシーを個別管理し、一人一人を尊重したケアを目指している。声掛けを工夫したり、部屋をパーティションで区切るなどして、プライバシーを守るよう努めている。また、広報誌への写真掲載などについても、同意を得ている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	毎月、管理者、全ての職員が参加して行われる定例会議に於いて、常日頃から優しい対応で、信頼関係を築きながら、各々の入居者本人の思いを知り、自由に自己表現できるようにしている、そうすることによって自己決定出来るように支援している。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員本位の介護ではなく、入居者本人の心地良い場所の提供やその雰囲気優先し、「今日は何がしたいのか?」「どう過ごしたいのか?」を伺い、その希望に沿って支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	普段から入居者本人の要望に沿った身なりを整えるようにし、特に外出する際には、女性は化粧をする、特にお気に入りの服に着替える、男性も同様に念入りに髭を剃る等、身なりを整えるようにしている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	当法人の畑で旬の野菜を収穫し、彩りや盛り付けに工夫し、健康面を考えながら、できるだけ薄味で食事の提供を行っている。配膳も同様に、片付け等に関しては、所定の場所まで持ち運びできる入居者にはお願いしている。	以前勤務していた管理栄養士が作成した献立の実績を基に、畑の野菜や頂き物の食材等も取り入れながら、毎日の献立を考えている。朝、夕は職員が、昼は調理師が交代で作っている。昼食は栄養、ボリューム共に充実し、見た目も食欲が出るような彩のよい盛り付けを心掛けている。外食では、利用者同士声を掛け合ってメニューを選ぶなど、楽しんでいる姿が見られる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	献立は、管理栄養士が行っていて、食材、一日の栄養バランスが把握できるようになっている。特にカルシウム、鉄分の補給ができるように心がけている。水分摂取は、経口補水液を作り、摂取しやすいように努めている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	食前に誤嚥防止の口腔体操を行っている。毎食後、口腔ケアを行い、毎晩ポリデント消毒を行っている。歯磨きは、本人に任せているが、認知症進行により困難な場合には、職員が最終的に確認を行っている。		

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来るだけ日中は、トイレ使用を支援し、オムツやパッドの使用を減らすようにしている。認知症の進行により排泄機能が低下している入居者に関して排泄パターンを知り、誘導し、排泄の失敗防止に努めている。	日中は、ほぼ全員の利用者がトイレで排泄できる状況にある。各々の排泄パターンを把握したうえで、声掛けにも工夫しながら、排泄の自立が保てるよう支援している。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	元気アップ体操や屋外の広大な敷地を散歩することによる運動を行い、水分摂取量の確認や繊維質を多く含む食品やヨーグルトを摂取するように心がけ、職員がそうした取り組みができるように摂取表を作成している。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	希望があれば、毎日、入浴可能な体制になっており、入浴時間は、昼食後から夕方にかけて時間帯で支援しているが、ADLが低下した場合、併設する認知症専用デイサービスのリフト浴を利用して入浴支援を行っている。	1日おきに、午後1時半～2時半ごろに入浴できる体制を整えている。冬場には、入浴のない日も手浴足浴も取り入れている。入浴剤やゆず湯などで季節を感じられる工夫もしている。入浴の際に血圧の急上昇や脱水症状を起こさないよう、麦茶による入浴中の水分補給を行っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活パターン表を作成し、睡眠状況の確認をし、日中は、心地良い疲労感が得られるような活動を提供することによって安眠に繋げている。但し、普段より疲労感が見られる場合は、休息を促すようにしている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	職員全員は、常に各々の入居者の疾病とその症状を把握し、処方箋を確認出来るようにしている。入居者の服用の副作用や効果を記録し、委託医の診察の際は、その症状や変化を伝え、経過観察を記録して支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	9人のグループを家族として捉え、様々な役割を担うことで張りのある暮らしが出来るように支援している自由時間には、楽しむ事で過ごせるように配慮し、ドライブ等で気分転換させるように退屈しない過ごし方を心がけている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	当法人の組織する家族会に協力してもらい、年2回近隣市町村へ小旅行に出掛けている他、ショッピングモール等に出掛けている。又、入居者が希望する場所にも出掛けており、日常的に外食にも出掛けている。	月に1～2回は外食に出かけている。近場のドライブでは、お菓子の工場や、フラワーパークに出かけている。さらに、春と秋には、事業所が企画した、家族と共に出かける小旅行も行っている。家族が個別に対応して外食の機会がある利用者もいる。	

醍醐の森川崎グループホーム

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	施設の買い物にでかけた際には、購入した金額の支払いを各々の入居者をお願いしている。又はその能力がある場合は、入居者本人の持っている財布より商品を購入が出来るように支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望があれば、電話も利用できるようにしてあり、手紙等も同様に葉書、便せんもいつでも利用できるようにしてある。希望があれば、いつでも家族や友人等と連絡可能な状態にしてある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	共有空間の温度、湿度は、常に適温適湿に保つように配慮し、トイレや調理室等が分かり易いように表示してある。季節感を感じられるような楽しい掲示物を作成している。また、庭に咲いている花を屋内に飾り、その空間作りをしている。	広々とした共有空間は見通しも良く、移動の際も安心である。大きな窓からは外光が入り明るい。部屋の装飾は季節感を取り入れて手作りされている。利用者の作品や写真もバランスよく配置されている。空調も管理されている。開放的な広いリビングは、パーティーションを上手に使うことで、パーソナルスペースを確保しながら何人もが同時にゆったり過ごすことができる。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	椅子等をホールだけでなく廊下や玄関先にも配置し、どの場所でも自分の時間を過ごせるようにしたり、気の合った入居者同士で過ごせるようにしたり、また、自分の部屋に招き入れられ、ゆっくり過ごせるように配慮している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室内の配置は、入居者と家族が決定し、自宅にいるような雰囲気でも過ごせるようになっている。入居前まで使用していた家具を持ち込み、自分の生活スタイルを維持し、心地良い環境を整えている。	居室は畳敷きだが、入口すぐの2畳ほどが板の間になっており、車椅子での入室もスムーズにできる。ベッド、エアコン、カーテン、押入れが備え付けである。家具やその他、自分の使い慣れたものを持ち込むことができ、部屋の飾りも好みに合わせ自由である。各々自分らしい部屋作りができるよう支援している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	共用の場所には、絵や大きな文字で入居者の目的が分かるようになっている。入居者が入居以前の自宅のトイレの位置によって入居する部屋を決めることもあり、安全かつ、出来るだけ自立した生活が送れるように努めている。		